本質主義的信念が性別に対する認識に与える影響

○浅井 暢子

(京都文教大学)

キーワード: 心理的本質主義, 性別

Impacts of psychological essentialism on perceptions about gender

Nobuko ASAI

(Kyoto-Bunkyo University)

Key Words: psychological essentialism, gender

目 的

しばしば人々は、恣意的に人間を分類した、社会的カテゴリーであっても、カテゴリーの間に遺伝子や血などの本質的な違いが存在するとの本質主義的信念を抱くことがある。カテゴリーを区別する「本質」の存在が知覚されると、カテゴリー境界の顕現性やカテゴリー化の有意義性が認知的に高まる(浅井・唐沢, 2013; Yzerbyt & Rocher, 2002)。そのため、所属カテゴリーに対して本質主義的信念を抱いた場合、人々は、当該カテゴリーが自己に与える影響を強く認識したり、自己を知る手掛かりとして所属するカテゴリーを用いやすくなると考えられる。

そこで、本研究では、性別カテゴリーに対する本質主義的信念に焦点をあて、上記の仮説を社会調査データから検証した。具体的には、カテゴリーが自己に与える影響の認識に関する指標として、性差別の認識を取り上げた。性別カテゴリーに強く本質主義的な信念を抱いている場合には、他者から否定的扱いを受けた際には、自らの性別に基づく差別として解釈しやすいと予測される。また、自己について知ろうとする時には、類似他者の情報が重要であることに鑑みると、性別を本質主義的に捉えている人は、自己を知る手掛かりとして「本質を共有した」同性の他者との比較を用いやすいと考えられる(e.g., Festinger, 1954)。そこで、性別に対する本質主義的信念とカテゴリー内比較の用いやすさの関連についても検討することとした。これらの試みを通して、探索的に本質主義的信念の影響力の一端的な解明を目指した。

方 法

調査方法・対象 全国9市区町村において選挙人名簿より2700人を無作為抽出し、質問紙を郵送で配布した。実施期間は2011年6~8月であり、回収数は713であった(男性: 319名、女性: 385名、不明: 9名; 平均年齢: 53.61; 回収率 25.9%)。

調査項目 (1) 属性: 性別、年齢、学歴、職業、結婚の有無について回答を求めた。(2) 本質主義的信念: 「性別」というカテゴリーの背景に本質の存在を知覚している程度を Haslam, Rothschild & Ermet (2000) の本質主義的信念測定尺度のうち、3項目を用いて測定した(必然性・類推可能性・均一性; $\alpha = .64$)。(3) 差別認識: 「性別によって差別されたことがあるか(個人的差別経験)」、「性別が原因で何かをあきらめたことがあるか(性別による挫折)」、「日本社会には性別による差別が存在する(社会における差別の存在)」の3項目の質問によって性差別に対する認識を尋ねた。(4) カテゴリー内比較: 生活に關して同性と比較する程度について、Crocker, Major & Steel (1998) を参考に作成した2項目を用いて測定した(例. 幸せかどうかを同性との比較から考える; $r = .51$)。

以上の質問には、全く当てはまらない(1) - 強く当てはまる(6) の6件法で回答を求めた。

結 果 と 考 察

本研究では、性別不明の回答者を除く694名のデータを分析対象とした。回答に欠損値のある参加者のデータは、分析ごとに除外した。複数の項目を用いて測定した変数については、評定平均値を算出し、分析に用いた。

個人的差別経験 ($M = 2.60$)、性別による挫折 ($M = 2.82$)、社会における差別の存在 ($M = 4.11$)、カテゴリー内比較 ($M = 2.60$) のそれぞれを従属変数として、階層的重回帰分析を行った。Step1において、年齢、学歴、職業、結婚の有無を説明変数として投入することで、これらの変数が従属変数に与える影響を統制した。続いて、Step2では、性別と本質主義得点を、Step3では性別×心理的本質主義得点と性別×結婚の有無の交互作用を投入した。

個人的差別経験、性別による挫折、カテゴリー内比較については、性別の主効果が認められ、女性は男性よりも、性別による個人的差別や挫折を経験していると報告しており、また、自分の立場を認識する際には所属カテゴリー成員と自己の比較を用いやすいことが明らかとなった($\beta_s > .15, ps < .05$; $\Delta R^2s > .10, ps < .01$)。さらに、これらの従属変数においては、本質主義得点の有意な主効果も認められた ($\beta_s > .22, ps < .01$)。すなわち、男女を問わず性別を本質主義的に捉えている人ほど、個人的差別や性別による挫折を経験しており、また自己を知る手掛かりとしてカテゴリー内比較を用いやすかった。

社会における差別の存在に関しては、性別と本質主義得点の効果が一切認められなかった。このことから、性別に対する本質主義的信念の影響は、個人的経験に関する認識に影響を与えるにとどまるとも考えられる。また、「日本社会はこういうものだ」というステレオタイプの知識に基づいていて社会における性差別の認識がなされたために、回答者の性別や本質主義的信念の影響が認められなかった可能性もある。

以上の結果は、性別に対する本質主義的信念が強い人にとって、性別は個人の生活を規定する重要な要因として認識されているとともに、自己について認識する際の基盤としても機能していることを示唆する。今後は、所属カテゴリーに対する本質主義的信念の強さが、個人的経験の解釈や自己に関する認知に与える影響について実験研究を行い、これらの要因の因果関連をより明確にする必要がある。

引用文献 ◆浅井暢子・唐沢穣 (2012) 血液型に対する本質主義的信念が合意性推測に与える影響 社会心理学会発表論文集。◆Crosby, F. J. (1984) ABS, 27, 371-386。◆Crocker, Major & Steel (1998) Social stigma. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske & G. Lindzey (Eds.), *Handbook of social psychology* (4th ed., Vol. 2) New York: McGraw-Hill pp. 504-553。◆Festinger, L. (1954). A Theory of Social Comparison Processes. *Human Relations*, 7, 117-140。◆Haslam, N., Rothschild, L., & Ernst, D. (2000) BJSP, 39, 113-127。◆Yzerbyt, V. Y., & Rocher, S. (2002) *Stereotypes as explanations*, (pp. 38-67). Cambridge University Press.

¹ 本研究は、東北大学グローバルCOEプログラム・社会階層と不平等教育研究拠点の支援を受けた。